

「研究報告書」

滋賀県朽木谷における里山利用の動態に関する総合的研究 —生活システムの変容と地域社会の再編との関係に着目して—

I 研究の概要

里山は、農山村に暮らす人々の生活および生業活動との関わりで成立してきた二次的な自然環境であり、また人々の生活に必要な物資を供給してきた生態資源である。その二次的自然環境は、人々の利用による攪乱と集落を基盤とする地域社会によって決められた一定の規制のもとで維持されてきた。しかし、高度経済成長を契機として日本の産業構造が大きな移り変わりをみせるなかで、農山村における生活様式や生業構造は急激に変容し、里山利用の体系もまた変貌をとげた。こうした変化のなかで、研究や環境保護団体などによって里山をめぐる保全・再生の動きが活発化し、特に都市の住民が中心となった活動が展開されている。近年では、地域住民を交えた取り組みもみられるが、里山が地域住民の生活システムとは切り離されたものとして扱われる傾向にある。

里山をめぐる問題の根底には、地域に暮らす人々の生活システムや社会の変化と関連するさまざまな要因が存在する。また、過疎化の進行や獣害といった地域社会が抱える問題も含めて総合的に解決策を探る必要性が強く求められている。本研究では、滋賀県朽木谷(くつきだに)の山間集落を対象とし、その周辺に広がる里山の利用の変遷を地域住民の生活システムの変容ならびに地域社会の再編過程との関係に着目しながら明らかにし、現在の里山がもつ意味を再検討することを目的とする。

2004年10月から2005年10月までの調査期間のあいだには、本研究の研究分担者と地域住民、現地NPOとのあいだで意見交換を重ね、さらにはエクスカージョンを実施し、里山に関する課題や問題点を討議する機会をもった。具体的な調査は、以下のサブテーマに沿って進められた。

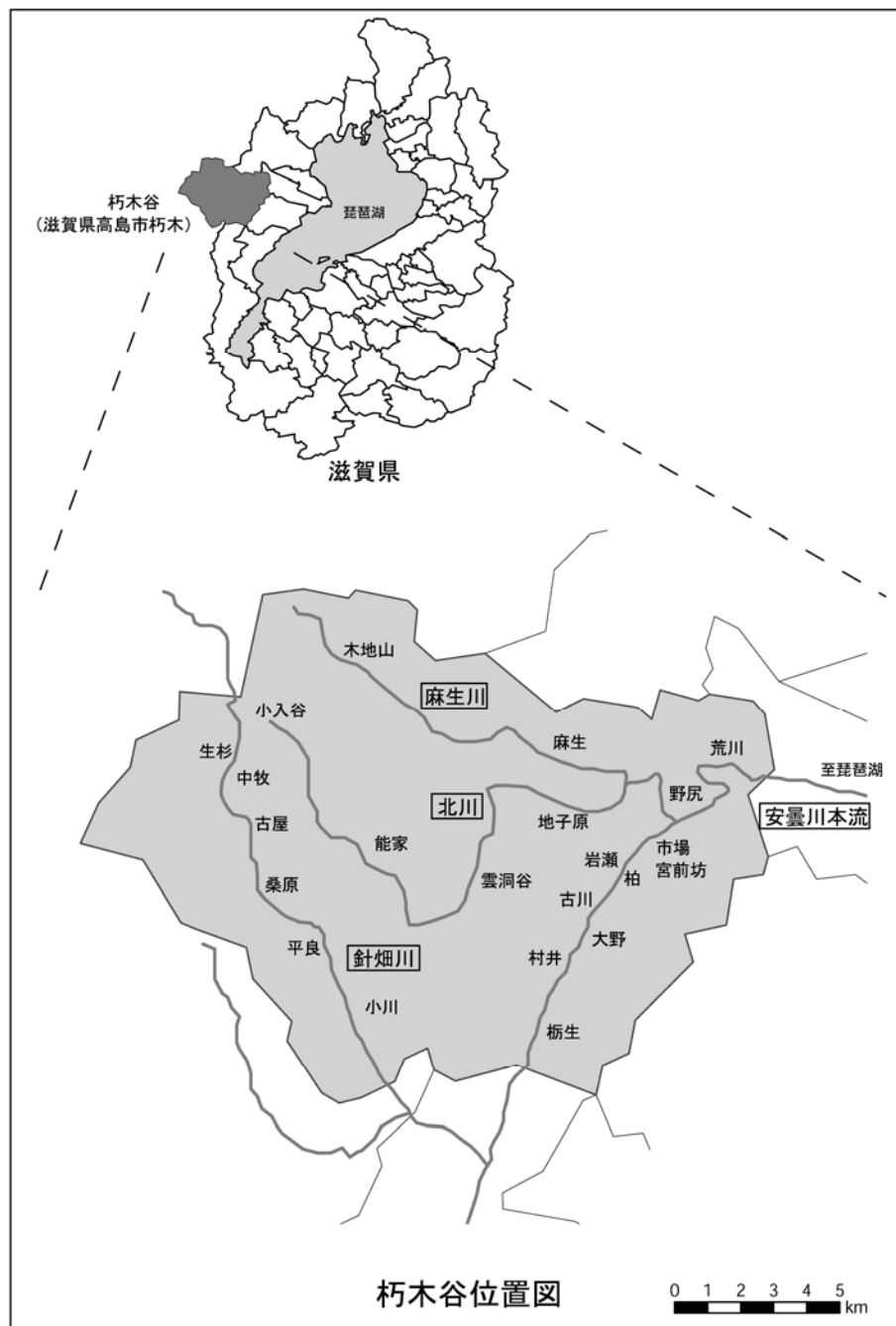
「里山をめぐる生態史」(Ⅲ章1節)では、地域住民による里山利用の変容と現在の植生構造との関係性について報告し、「服飾文化からみた生活の変遷」(Ⅲ章2節)では、里山をめぐる物質文化のひとつである衣服に着目し、朽木谷における暮らしの変化を示す。「朝市活動の展開と里山利用」(Ⅲ章3節)では、近年盛んになった朝市とそれに伴う里山利用との関係を、「集落社会の変化」(Ⅲ章4節)では里山利用・保全の中心的な担い手である地域社会・地域住民に着目し、集落社会の変化と現状について報告する。

Ⅲ章5節、6節では地域住民と野生動物との関係に注目し、「獣害の現状と対策」(Ⅲ章5節)で近年、深刻化する獣害問題の現状を示し、「人—野生動物関係の変遷」(Ⅲ章6節)では、地域住民と野生動物の共存について過去をふまえながら検討する。そして最終章ではこれらの研究を総括し、朽木谷における里山の現代的な意義について検討し、さらに若干の提言を試みた。

(水野一晴)

II 調査地の概観

滋賀県北西部に位置する朽木谷（滋賀県高島市朽木）は、東西約 24km、南北約 16km、面積約 165.4 km²の広がりをもつ。周囲は標高 450m から 900m の山々に囲まれ、中央部には 800m 前後の急峻な山並みが続く溪谷をなし、総面積の 93%は山林・原野となっている。気候は北陸型に属し、年平均気温は 12.8 度、年間降水量は 2300mm 前後である。積雪寒冷地帯であり、初雪は 11 月下旬、晩雪は 3 月下旬であり、積雪量は 2m 以上に達することもある。水系は、琵琶湖にそそぐ安曇川とその支流である針畑川、北川、麻生川の 4 河川によって構成される。これらの河川は古来より木材の搬送路として昭和初期まで利用されていた。



従来、朽木谷では、豊かな山林資源を背景とした植林、木材搬出、製炭などの林業が主要な生業であった。また、総面積にしめる農地の割合は、1.7%とそれほど大きくはないが、稲作や畑作なども営まれており、とくに稲作に関しては、集落周辺の山林の草木を水田の肥料として投入するユニークな施肥方法がみられた。1960年代以降、従来からの生業は大きく変貌し、1960年に70%を超えていた産業別就業人口における第一次産業従事者数の割合は、1995年には15%まで減少した。また、1960年に4532人であった人口は、2004年には2486人にまで落ち込んでおり、過疎化が大きな問題となっている。朽木谷に相当する高島郡朽木村は、2005年1月に周辺の町村と合併し高島市となった。

Ⅲ 各研究テーマの概要と成果

1. 里山をめぐる生態史

—ホトラヤマとミバエヤマに着目して—

(1) テーマの位置付け

朽木谷では、異なる複数のタイプの里山が存在してきた。なかでも、厩堆肥の供給源としてのホトラヤマと天然木材の供給源であるミバエヤマは、人々が生活していくうえで、特に重要であったと考えられる。本章では、針畑川流域に位置する生杉(おいすぎ)を調査地とし、ホトラヤマとミバエヤマを中心とした里山利用の変遷と現在の植生について報告する。

(2) ホトラヤマとミバエヤマ

ホトラヤマとは、集落の周囲に広がる、水田に入れる肥料や家畜の敷草を調達するための採草山である。人々は毎年春先に集落総出の共同作業によって山を焼き、その後に芽生えた膝丈ほどのコナラの幼樹(これをホトラと呼ぶ)を各世帯の女性が刈り取った。刈り取ったホトラは、まず牛舎の敷草とされ、そして牛糞と混ざった敷草は厩肥として水田に施肥された。生杉では、集落共有のホトラヤマ(約200ha)が存在したが、江戸時代に各世帯が持つ水田面積に応じた区画割り(割地)がなされ、世帯単位で保有されるようになった。稲作を営み、犁を引くための牛を各世帯で1~2頭飼養していたかつての生杉では、ホトラヤマの重要性はきわめて高かったという。しかし、農業の機械化がすすみ、家畜を飼養しなくなったことを理由として、昭和30年代にホトラヤマは利用されなくなった。そのため現在、かつてのホトラヤマは森林化が進んでいる。

この地域の山林のもうひとつの特徴として、天然更新に由来する針・広混交林が成立している点があげられる。こうした山林はミバエヤマとよばれ、そこに生育する針葉樹は優良な建材として利用されてきた。例えば、140haの大面积を保有するある世帯では、80年前には自前の山から木を調達して住居を建築したほか、木材市場が良好だった戦後から昭和40年代にかけては木材の一部を売却し大きな利潤を得たという。しかしながら、昭和40年代以降、外国輸入材の供給が高まったことを背景として、ミバエヤマの利用も衰退した。

(3) ホトラヤマの植生

ホトラヤマの優占種はコナラである。年輪の分析から、現存するコナラの約7割がホトラヤマの利用されていた時代にすでに定着していたことが明らかになった。また、ホトラヤマの終焉間近に定着した個体は、刈られることによって初期成長が著しく抑制されていたが、終焉後には旺盛な成長を開始していたことも示唆された(図1-1)。森林化の初期段階にはホトラとして利用されていたコナラが先駆者となったと考えられる。

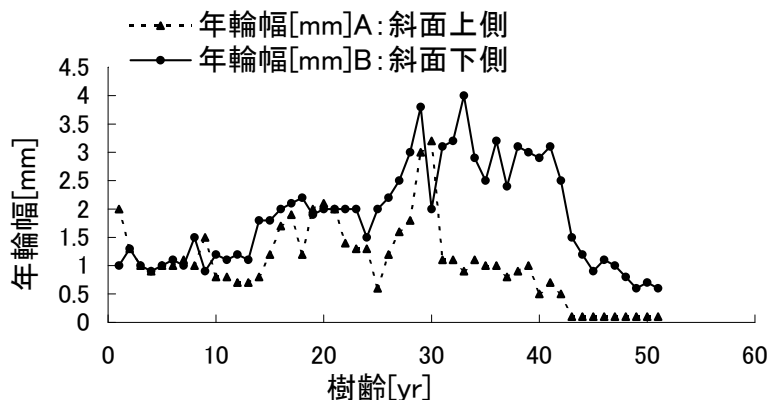


図1-1 51年生コナラ(DBH16.9cm)の年輪幅の変動

現在のホトラヤマには多様な種が含まれるが(表1-1)、自然の状態を比較的留めているミバエヤマの多様度との間には大きな差はみられなかった(図1-2)。一方、林冠構成種を比較すると、ミバエヤマには多数の優占種がみられる

が、ホトラヤマではほぼコナラに限定されていた。コナラの樹冠下には成長途上にある樹木も多数密生している。これらの個体群の成長とともに今後種の入替わりが激しく起こり、森林全体が大きく動態すると考えられる。しかし、その一方で、近年ではシカによる食害のために、林床のチマキザサや樹木の実生が減少していると考えられる。この点については今後、詳しく調査する必要がある。

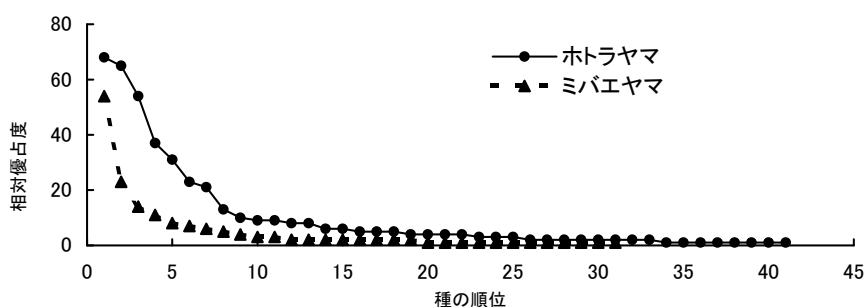


図1-2 相対優占度曲線を用いた植生の多様度の比較

表1-1 ホトラヤマにおける毎木調査の結果

樹種	個体数 [本]	出現頻度 [%]	胸高断面 積 [c m ²]	胸高断面 積比 [%]	平均胸高直径(最大 - 最小)[cm]		
コナラ	65	15.1	23732.0	47.2	19.5	42.1	4.9
ネジキ	68	15.7	2559.7	5.1	4.5	11.5	1.7
リョウブ	54	12.5	3076.0	6.1	4.6	9.8	2.2
アカマツ	6	1.4	7482.4	14.9	38.0	52.4	16.6
イヌシデ	23	5.3	4669.5	9.3	14.1	30.3	1.9
マルバマンサク	37	8.6	1493.4	3.0	3.2	6.9	1.0
コハウチワカエデ	31	7.2	1014.8	2.0	5.6	11.8	1.5
アカシデ	21	4.9	485.3	1.0	4.3	14.5	1.8
オオモミジ	13	3.0	669.4	1.3	6.2	17.2	1.8
ソヨゴ	9	2.1	456.2	0.9	6.2	16.0	1.5
ウワミズザクラ	8	1.9	534.6	1.1	8.0	17.9	2.8
ウラジロノキ	4	0.9	739.3	1.5	8.4	10.7	4.9
ヤマボウシ	10	2.3	37.1	0.1	1.9	3.1	0.5
カバノキ. sp	6	1.4	475.5	1.0	7.0	21.5	2.0
ブナ	9	2.1	65.1	0.1	2.5	4.3	1.0
ハクウンボク	8	1.9	133.3	0.3	4.1	8.0	1.7
コシアブラ	5	1.2	348.9	0.7	7.8	15.5	3.1
タカノツメ	5	1.2	215.7	0.4	5.8	11.5	2.8
ウリハダカエデ	2	0.5	476.4	1.0	12.2	16.5	7.9
ヤマモミジ	5	1.2	51.1	0.1	3.2	3.8	2.2
アセビ	2	0.5	350.6	0.7	7.0	8.6	5.3
タンナサワフタギ	4	0.9	59.5	0.1	2.7	4.4	1.4
クロモジ	4	0.9	33.1	0.1	3.2	3.9	2.5
ウリカエデ	3	0.7	140.6	0.3	7.3	10.8	4.9
ヤマツツジ	4	0.9	4.9	0.0	1.2	1.7	0.8
ホウノキ	1	0.2	317.2	0.6	20.1	20.1	20.1
ミズナラ	2	0.5	196.0	0.4	8.0	10.5	5.4
イタヤカエデ	3	0.7	34.6	0.1	3.2	3.8	2.1
ナツツバキ	3	0.7	20.4	0.0	2.7	4.4	1.6
コミネカエデ	2	0.5	88.8	0.2	4.7	5.8	3.5
ヤマフジ	2	0.5	76.0	0.2	6.9	7.8	6.0
アオハダ	2	0.5	16.4	0.0	3.1	4.0	2.2
オオカメノキ	2	0.5	10.9	0.0	2.6	3.0	2.2
クマシデ	2	0.5	6.6	0.0	7.0	11.0	2.9
タカノツメ	1	0.2	111.2	0.2	11.9	11.9	11.9
エゴノキ	1	0.2	22.9	0.1	5.4	5.4	5.4
タマアジサイ	1	0.2	21.2	0.0	5.2	5.2	5.2
ガマズミ	1	0.2	10.4	0.0	2.1	2.1	2.1
タムシバ	1	0.2	5.3	0.0	2.6	2.6	2.6
イヌツゲ	1	0.2	4.2	0.0	2.3	2.3	2.3
ヤブデマリ	1	0.2	1.0	0.0	1.1	1.1	1.1
総計	432		50246.9				
立木密度[本/ha]	3031.6						
Basal Area[m ² /ha]	35.26						

* 調査区は異なる斜面4ヶ所において谷から尾根までが入るように設置した。面積は計1425m²。測定は高さ1.3m以上の個体を対象とした。

(4) ミバエヤマの植生

Y世帯の山林では、広葉樹 15 種とスギ、ヒノキ、アスナロの針葉樹 3 種が生育していた(表 1-2)。これらの針葉樹がいずれも高い優占度を示した点が特徴的である(表 1-3)。また、スギは斜面全域に、アスナロは尾根に、ヒノキは中腹に生育するという分布特性を示した(図 1-3)。一方、N世帯の山林では広葉樹 30 種に対し針葉樹はスギ 1 種のみが分布していた。スギは斜面全域にみられたが、優占していたのは尾根部に限られていた(図 1-4)。Y世帯のミバエヤマはN世帯のそれに比べて針葉樹の混交率が高いだけでなく、分布特性にも違いがみられた。

この結果から、Y世帯は資源量を枯渇させることなく長年にわたって針葉樹を伐採してきたといえる。それを可能とした要因としては、保有面積の広さに加え、小径木に伐採規制を設けたことや広葉樹の巻枯らしを実施したことが関与している。また、伐採後の切り株表面は針葉樹によって実生更新を助長するセーフサイトとなったと考えられる。

表1-2 Y世帯、N世帯のミバエヤマにおける毎木調査の結果

	N世帯			
	Y世帯	谷部	中腹	尾根部
出現種数(針葉樹; 広葉樹)	18 (3; 5)	16 (1; 15)	16 (1; 15)	18 (1; 17)
本数[本]; 密度[本/ha]	112; 2800	35; 1555	43; 1075	88; 2200
合計胸高断面積[m ²]; Basal Area[m ² /ha]	2.67; 66.75	1.15; 51.1	1.87; 46.8	1.68; 42.0
平均胸高直径(SD); Min-Max [cm]	12.4(12.5); 1-44	16.3(11.6); ; 2-43	18.8(13.9) ; 1-53	10.1(12.0) ; 1-65

* 毎木調査はY世帯の山林では400m²、N世帯の山林では谷部で225m²、中腹と尾根部では400m²の調査区を設けた。測定は胸高直径が1cm以上の樹木を対象とした。

表1-3 針葉樹の優占状況と残存する切り株の本数、密度、サイズ

		Y世帯	N世帯		
			谷部	中腹	尾根部
出現頻度[%]	スギ	39.6	20	14	47
	ヒノキ	8.91	-	-	-
	アスナロ	16.8	-	-	-
胸高断面積比[%]	スギ	32.8	13.3	2.1	35.6
	ヒノキ	14.4	-	-	-
	アスナロ	14.5	-	-	-
切り株本数[本]; 密度[本/ha]; 平均地際直径(SD); Min-Max [cm]	針葉樹*1	42; 1050; 33.8(10.0); 14.2-55.7	0	0	22; 550; 35.2(10.5); 21.2- 62.4

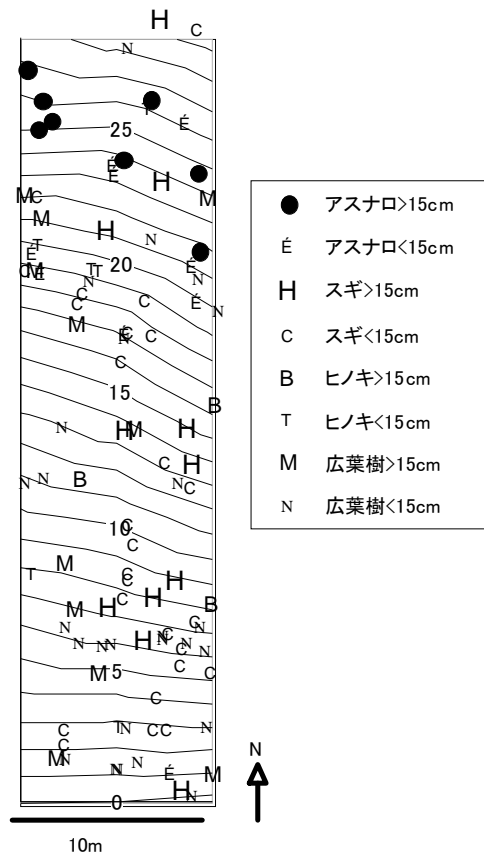


図1-3. Y世帯ミバエヤマの地形と樹木の分布

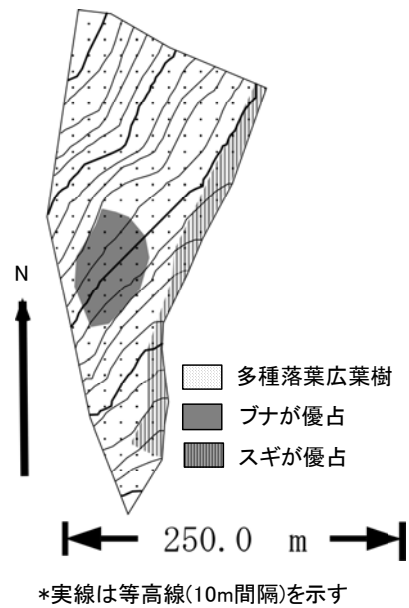


図1-4. N世帯ミバエヤマの地形と群落の分布

(平井將公)

2. 服飾文化からみた生活の変遷 —女性からの聞き取りをもとにして—

(1) テーマの位置付け

朽木谷の生活のなかで、戦後最も激しい変貌をとげたもののひとつに服飾文化をあげることができる。服飾の素材に里山資源を用いなくなった現在、麻の加工や機織技術は過去のものとして静かに忘れ去られつつある。

当時の服飾文化を現代社会のなかに新たに意味づけるうえで、急速な服飾文化の変容がどのような過程で進行したかを顧みる必要があるだろう。本節では、戦後から高度経済成長期にかけての服飾文化の変遷に焦点をあて、朽木谷における生活システムの変容の一端を描きだすことを目的とする。

(2) 衣服・衣服作りの変遷

かつて朽木谷における衣服作り（麻織り、藁加工、着物作り）を担っていたのは女性である。朽木谷で生まれ育った調査当時 70 歳～81 歳（1924～35 年生まれ）の 7 人の女性からの聞き取り結果をもとに、時代を三区別し、衣服・衣服作りの変化を示す(表 2-1)。

①終戦まで：着物（和服）の全盛期

この時期、彼女らは、小学校（全員）、高等科（5人）を出た後は京都などで奉公（2人）、朽木谷で家事手伝い（全員）などをしていた。日常着には木綿の着物、木綿製のカルサン（下衣）、藁草履を身に付けていた。稀にだがワンピースを着たり、あるいは修学旅行を契機としてセーラー服を購入したという。はじめて洋服を着た時期は1937年から45年にかけてである。高等科ではセーラー服やブラウス、スカートを着用するようになるが、学校を修了して生家に戻るとふたたび着物とカルサンに戻った。この頃、ほとんどの大人は、山仕事のさいに麻の着物を着用していた。この時期に、彼女ら自身、麻織りをするとはなかったが、麻栽培や糸作りを手伝ったという。また、麻の繊維を縦糸に、山野に自生する葛の繊維を横糸に用いて布を織りあげることもあった。

②戦後：麻の着物の衰退期

戦後まもなく（1946年～54年）、彼女らは18歳～22歳で結婚し、姑から教わって麻織りはじめ、自らも麻の着物を着るようになった。しかし1948年に大麻取締令が発令したため、この時期に麻栽培ができなくなり、麻を織ることもなくなった。

③高度経済成長期以降：洋服の普及期

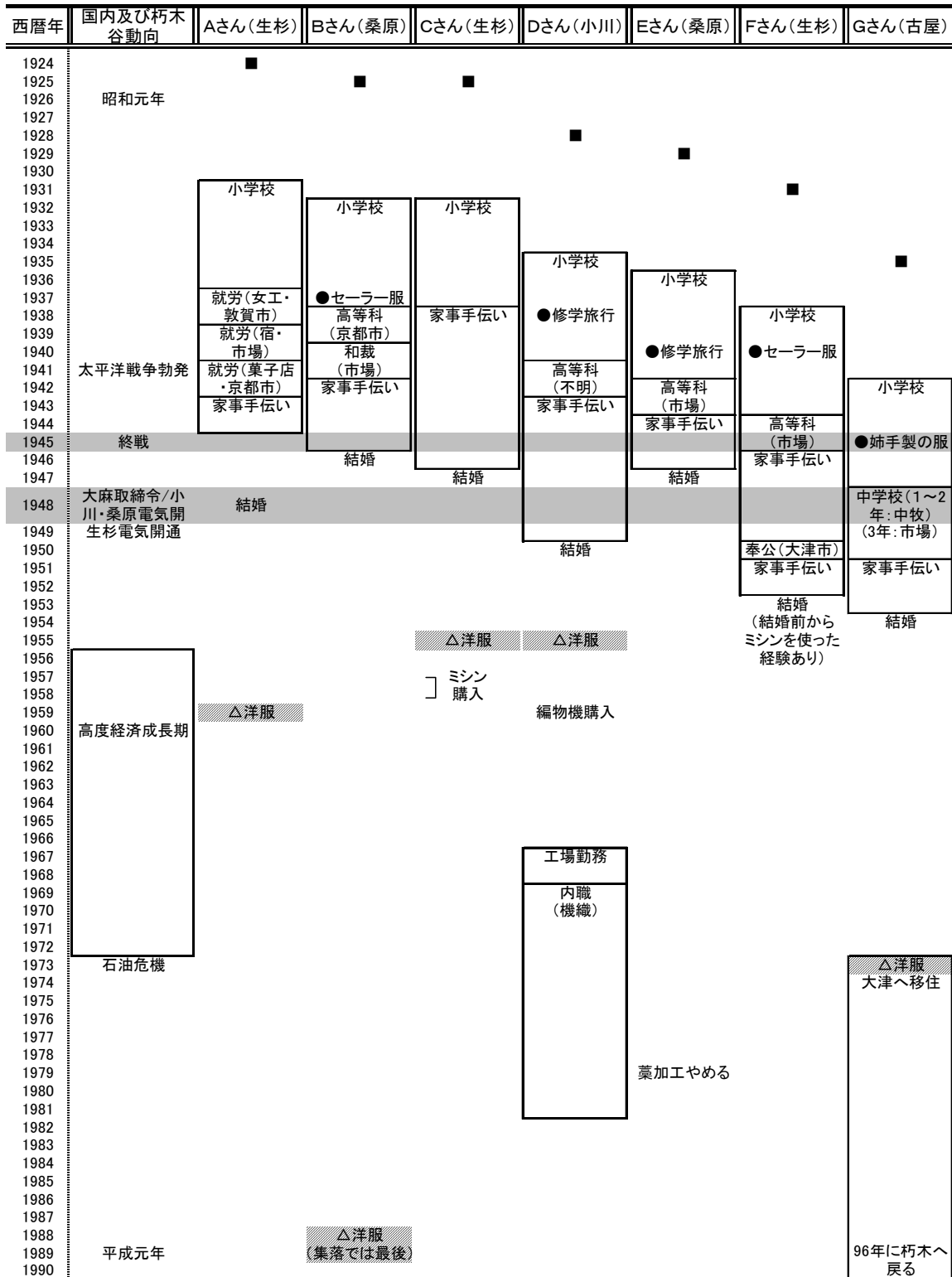
昭和30年代（1955年～64年）は洋服が広まった時代であったと語る。1950年代から洋服やサンダルなどが出回るようになり、次第に藁の加工もしなくなった。山仕事が全盛であった昭和50年（1975年）頃までは、木綿の着物とカルサンを着用していたが、林業が廃れて山に入らなくなったという。それまで反物を持ち込んでいた行商人に「ほかの家も買ったから」と勧められて洋服を購入したり、「着物では行事に行きづらくなった」などという理由から洋服を着るようになり、着物を着ることが減っていった。最後まで着物とカルサンを着続けた女性も、1988年頃、周囲の勧めで洋服を着るようになったという。朽木谷では、洋裁の普及はあまり活発ではなかった。昭和30年（1955年）前後にミシンが、その後編物機が導入されたが、購入したがほとんど使わなかった者が多い。

現在女性たちは、自給用の野菜作りや稲作を続けている。畑仕事にはブラウスにもんぺ姿が一般的であり、日常用にはもんぺのようにゆったりしたスラックスなどが用いられる。現在、着物を着る機会は冠婚葬祭に限られる。

(3)服飾の変化と里山

7人の女性の語りから、朽木谷においては、大麻取締令や高度成長期における衣料品の普及などを背景として、里山の資源を利用した衣服作りが戦後10～20年ほどの間に廃れた。また着物やカルサンを着用しなくなった背景として、林業の衰退によって山に入らなくなったこともあげられる。しかし、女性は現在も野良仕事にはカルサンに似たもんぺを着用している。朽木谷の服飾文化は、戦後数十年で急激に変化した。しかし、これは時代の流れに応じて、彼女ら自身が、ふさわしい服装を取り入れた結果である考えられる。

表2-1. 女性のライフヒストリーからみた衣服の変遷



■ 生年
 ●セーラー服 最初に洋服を着た機会/種類
 △洋服 洋服を着始めた大まかな時期

(遠藤聡子)

3. 朝市活動の展開と里山利用

(1) テーマの位置付け

朽木谷では、1988年に始まった朝市が来客者の増加とともに急速に発展し、現在では地域住民の重要な生業のひとつとなっている。本節では、朽木谷で開かれるようになった朝市の現状を報告し、その活動と里山利用との関係性について検討する。

調査は、朽木村観光協会が所蔵する資料の分析と朝市出品者への聞き取りを中心に行なった。対象とした資料は、2004年4-5月、10-11月に開催された計18回の朝市に関するものである。聞き取り調査は、朽木谷の北川沿いに位置する雲洞谷(うどうだに)で実施した。

表3-1. 集落別にみた朝市への出店回数

集落名	出店回数			割合(%)
	春期合計	秋期合計	4ヶ月計	
小入谷	10	10	20	4
宮前坊	10	14	24	5
雲洞谷	72	88	160	32
栃生	7	9	16	3
野尻	28	30	58	12
地子原	7	8	15	3
市場	51	54	105	21
荒川	10	9	19	4
岩瀬	19	17	36	7
麻生	16	9	25	5
生杉	8	11	19	4
(不明)	1	1	2	0
計	239	260	499	100

※2004年4.5月(春期)と2004年10.11月(秋期)のそれぞれ9回(計18回)の朝市を対象とし、観光協会に提出された資料より作成した。

商品を工夫する姿が見出せる。その背景には、対面販売を通じて客側の意見が反映されている点も考えられる。雲洞谷で朝市活動が一定の成功を収めた要因のひとつに、栃餅保存会の存在を指摘できる。栃餅保存会は朝市に先駆けて1986年に栃餅製作技術の伝承を目的として発足し、現在では7世帯が参加している。発足当初は自分で作ったものを売ることには抵抗があり、朝市への参加には消極的であった。しかし、朝市の発達と観光協会のPRによって、栃餅が朽木谷の特産品として内外から注目され収益も増加し始めると、多くの会員が積極的に参加するようになった。現在では、栃餅販売は年間91万円ほどの収益を得ることができる(表3-3)。

(2) 朝市の現状と雲洞谷における取り組み

朝市の運営は、当初は朽木村観光協会のもとで行なわれたが、1998年以降は「新本陣朝市組合」が主体となっている。2002年の段階では、15集落の44世帯および3団体が組合員として登録されている。なかでも雲洞谷の登録者が12世帯と最も多く、調査期間中の出店回数も最も多かった(表3-1)。

出品された品目をみると、雲洞谷からは計79種がみられ、その内訳は加工食品が43種と最も多く、次いで野菜22種、山菜5種、木工製品5種と続く(表3-2)。これらを出品した世帯数に注目すると、品目の半数近く(44品)が1世帯のみが出品する「独自の商品」である点特徴的である。参加回数の多い「継続的出店者」ほど、「独自の商品」の数が多い傾向がみられ($r=0.64$)、また他の世帯と競合しないよう商

表3-2. 朝市に出品された品物と回数および出品世帯数

	品名	出品回数(のべ)			出品した世帯数	
		春期	秋期	合計		
加工食品 (43種)	アユ佃煮	2	6	8	2	
	稲荷寿司	8	7	15	1	
	ウグイ佃煮	1	0	1	1	
	梅干	5	13	18	6	
	エビ・マメ煮	1	0	1	1	
	おにぎり	0	11	11	2	
	おはぎ	6	5	11	1	
	かやくご飯	5	1	6	1	
	きんぴらごぼう	0	3	3	1	
	栗おこわ	2	6	8	1	
	鯖寿司	24	27	51	4	
	鯖なれずし	15	25	40	5	
	鯖へしこ	18	19	37	5	
	山菜おこわ	21	15	36	3	
	しめ鯖	0	1	1	1	
	ぜいたく煮	3	1	4	1	
	ゼンマイ煮	1	0	1	1	
	赤飯	26	38	64	5	
	炊き込みご飯	8	8	16	1	
	たこやき	0	1	1	1	
	ちらし寿司	1	5	6	1	
	パン	5	4	9	1	
	フキ煮	2	2	4	2	
	マツタケご飯	0	1	1	1	
	みそ	2	1	3	1	
	ゆで卵	4	7	11	1	
	ようかん	8	11	19	2	
	(餅類)	あんころ餅	0	3	3	1
		カキ餅	6	2	8	1
		こわ餅	9	9	18	2
		白餅	21	19	40	6
		栃餅	17	18	35	7
		栃餅(餡入り)	9	9	18	1
		ぼた餅	3	5	8	2
		ヨモギ餅	14	17	31	6
		ヨモギ餅(餡入り)	9	9	18	1
		(漬物類)	浅漬け	1	1	2
	カブ漬け		3	1	4	2
	からし漬け		2	0	2	1
	たくわん		14	3	17	5
	ミョウガ漬け		0	2	2	1
	漬物(詳細不明)		4	3	7	4

	品名	出品回数(のべ)			出品した世帯数
		春期	秋期	合計	
野菜 (22種)	赤ズイキ	0	9	9	1
	エダマメ	4	6	10	1
	カブラ	5	0	5	1
	キャベツ	1	2	3	2
	コイモ	0	5	5	1
	コメ	4	1	5	3
	サトイモ	0	4	4	2
	シイタケ	8	9	17	1
	ダイコン	3	5	8	4
	チンゲンサイ	1	0	1	1
	トウガラシ	0	4	4	3
	ナス	0	1	1	1
	ニラ	1	0	1	1
	ネギ	1	1	2	2
	ハクサイ	0	4	4	3
	ハヤトウリ	0	2	2	1
	ホウレンソウ	3	1	4	2
	ユズ	0	2	2	2
	マメ	0	1	1	1
	まびき菜	2	0	2	1
	ミズナ	1	0	1	1
	野菜(詳細不明)	4	0	4	3
山菜 (5種)	ウド	3	0	3	2
	コゴミ	3	0	3	2
	タケノコ	2	0	2	2
	フキ	5	1	6	3
	ワラビ	3	0	3	3
木工製品 (5種)	コースター	3	1	4	1
	鍋しき	6	7	13	1
	箸おき	2	0	2	1
	花立	0	1	1	1
プランター	1	0	1	1	
その他 (4種)	肥料	1	0	1	1
	木酢	0	1	1	1
	木炭	1	0	1	1
	不明	1	0	1	1

※2004年4,5月(春期)と2004年10,11月(秋期)のそれぞれ9回(計18回)の朝市を対象とし、観光協会に提出された資料より作成した。

※網掛けは1世帯のみからしか出品されていない独自の商品

※下線を引いた品物は山林資源を原料としたもの。

(3) 朝市活動と山林利用

表 3-2 にみられた品目のうち、山林の資源を原料としているものは、クリ・トチの実などの果実類、ゼンマイ・ヨモギなどの山菜類、木工製品用の木材や竹などである。これらの特徴は、利用する世帯数は多いが出品回数は少ない「多世帯による散発的利用」である点と、利用が狭い範囲に限定され小規模な点である。最も利用頻度の高かったものはトチの実であるが、近年では野

表3-3. ある1回の朝市における栃餅の収益

収入:	84パック(420個)	33600円
支出:		14180円
(内訳)	トチの実(3.6kg分)	2880円
	もち米(12升分)	7200円
	施設使用料(1升あたり200円)	2400円
	灰	約960円
	輸送費	約240円
	朝市出店料	500円
純利益 (収入-支出)		19420円
年間の推定純利益(47回分)≒91万円		
※平成17年6月4日のある1世帯の例から推定した。 ※支出はこの日分の420個の栃餅販売に使用されたもの。		

生動物による食害のために自家調達が困難となり、外部から購入する場合も多い。

(4) まとめ

雲洞谷にみられた朝市活動に伴う山林利用は、二次的自然環境の形成を促進するような大規模かつ面的な攪乱を引き起こすものではなく、小規模かつ散発的なものであった。しかし、朝市の重要な役割は、「山の産物」を望んでやってくる都市民の要望・価値観が、朝市における対面販売を通じて直接出店者に伝わることによって、かつて生活システムの一部であった山林資源の利用が見直され、そして新たな価値が創出されている点にある。住民の生活システムと周囲の自然環境との関係の希薄化という里山をめぐる本質的な問題を考える上で、朝市活動は微々ながらも両者の関係修復に寄与している点で大きな意味があると考えられる。しかし、朝市継続の上でも、山菜などの生育地である二次的自然環境の創出が重要な課題であり、さらに野生動物による食害への対策も検討する必要がある。

(藤岡悠一郎)

4. 集落社会の変化

—神社・自治組織・NPOに着目して—

(1) テーマの位置付け

里山の利用や保全の中心的な担い手は、その地域に暮らす地域住民である。しかし、高度経済成長期以降、日本の中山間地の多くでは、その担い手となるべき住民の数が減少し、同時に地域社会の様相も変貌した。

朽木谷は、滋賀県下のなかでも、過疎化の進行がきわめて顕著な地域のひとつである。人口が減少し始めたのは、昭和30年代(1955年)以降からであり、1960年に4532人あった人口は、2004年には2426人にまで減少している(表4-1)。朽木谷のなかでも、過疎化の進行がもっとも著しいのが、針畑川流域の諸集落である(表4-2)。近年、この地域では、地域おこしと森林保全を目的としたNPOが設立された。これにともない集落外からの移入者(5世帯、10名)がみられるようになった。

本節では、針畑川上流域(上針畑)に位置する生杉、小入谷(おにゅうだに)、中牧(なかまき)、古屋(ふるや)の4集落で実施した現地調査の結果をもとに、とくに神社祭祀および集落を基盤とした地域自治組織、NPOの活動などに着目し、集落社会の変化について報告する。

表4-1. 朽木谷における人口変化

	1960年人口	2004年人口	1960年を100.0としたときの指数
安曇川筋	2548	1882	73.9
針畑川筋	744	163	21.9
北川筋	769	255	33.2
麻生川筋	471	126	26.8
朽木谷全体	4532	2426	53.5

(役所統計などから)

表4-2. 針畑川筋の4集落における人口変化

集落	1960年人口	2004年人口	1960年を100.0としたときの指数
生杉	123	33	26.8
小入谷	69	18	26.1
中牧	117	21	17.9
古屋	133	20	15

(役所統計などから)

(2) 神社祭祀

滋賀県は、宮座と呼ばれる独特の神社祭祀の形態が広く分布することで知られる。生杉、小入谷、中牧、古屋の4集落の氏神（鎮守）である大宮神社の祭祀も宮座の特質を備えたものであった。宮座の特徴として、専属の世襲の神主をもたず、地域住民が年番で神主を務めることがあげられる。大宮神社では4名の神主が年齢順に一年交替で務め祭祀にあたっていた。しかし、1965年頃より神主の数は2名に減り、さらに2000年には神主という名称は廃止され、宮守に変更となった。

神主・宮守の仕事は、一年間のうちの定められた祭日に、神社に詣で灯明や神酒を供えることにある。従来は、「神主が宮さんに出向くのは一年に180日」と言われるほど祭日の数は多く、また境内に設けられた仮屋で夜を明かして籠らなければならない日も定められていた。しかし、現在では籠ることはなくなり、祭日も21日に減少した。宮守・神主を務めることができる者は、4つの集落で生まれた長男に限られており、新しく移住してきた者は、直接的に祭祀に関わることはできない。

(3) 地域自治組織

調査地では、4つの集落のそれぞれが独立した地域自治組織の単位として機能していたが、人口が減少した昭和40年以降、小入谷、中牧、古屋は合併し「針畑区」となり、「生杉区」と「針畑区」の二つの行政区に再編された。

それぞれの区では、区長、代理者、年行事、部落員などの役員が、地域住民のなかから選出され、集落の行政にかかわる仕事を担当する。従来、各役員は、年度末の総会の場における選挙で決められることになっていたが、針畑区では持ち回りで役職を選出するように変化した。また宮座の場合とは異なり、部落行政においては移入者も区長や代理者などを務める例が認められる。

集落総出の共同労働を普請と呼ぶ。生杉では、道普請（7月）、川普請（7月）、寺普請（8月）、越冬普請（12月）が、現在でもしっかりと実施されている。普請には、原則として一つの世帯から一名が参加し、新しく移入してきた世帯も寺普請を除く（墓所をもっていないため）すべての普請に参加している。

(4) NPOの活動

中牧を拠点として、2001年にNPO法人・朽木針畑山人協会が設立された。この協会の立ち上げに中心的に関わったのは、朽木谷の外からの移住者である。彼らは、地域住民と会合を重ね、協会を設立した。このように山人協会の特徴は、外部者と従来からの居住者とが一緒になって組織

を立ち上げた点にある。

山人協会は、町からの中学生の修学旅行受け入れたり、各種イベントを企画するなどして、都会の住民と地域住民との交流活動をすすめている。また、休耕田を利用した自然農業を実施したり、周囲の林道の整備や復元を手がけたりするなど、一貫して地域の環境や文化に寄りそった活動を展開しつつある。

(5) 新旧の住民がつくりだす新たな地域社会

過疎化が深刻な問題になるなか、朽木谷の集落社会は、いま新たな岐路にたっている。とくに地域の信仰の拠点である神社の祭祀においては、その担い手の数が減少し、祭祀そのものが簡略化されてきている。現在、宮守を務める男性の年齢も70歳代となっており、今後は祭祀の継続も危ぶまれる状況にある。いっぽう地域自治組織においては、NPOの関係で新しく移入してきた人たちも参入することにより、共同労働は維持されている。従来からの住民と新規に移入してきた住民との共同によって、新たな地域社会が再編されつつあるとみることができる。

(岡本雅博)

5. 獣害の現状と対策

(1) テーマの位置付け

野生動物による農作物や林産物への被害(獣害)は日本各地で大きな社会問題となっている。朽木谷においても獣害は深刻な問題であり、その背景には生業形態および過疎化・住民の高齢化といった地域社会や里山の植生環境の変化をあげることができる。本節では、獣害の実態と被害対策から、朽木谷における獣害問題の特徴を明らかにする。

(2) 方法

調査は、滋賀県高島市朽木の北川流域に位置する2集落(雲洞谷、能家)、針畑川流域に位置する7集落(小入谷、生杉、中牧、古屋、桑原、平良(へら)、小川)、および隣接する京都市左京区久多の2集落(川合、下の町)で行なった。

2004年11月から2005年9月まで、19名の住民からのべ26回にわたり、獣害の状況や被害対策について聞き取り調査を実施した。また、朽木いきものふれあいの里、高島市役所朽木支所、滋賀県庁高島県事務所などでも資料収集を行なった。

(3) 結果

野生動物による食害は、米、イモ類、野菜類など、作付けされているほとんどの作物に及んだ。また、山菜やスギの幼樹などの林産物も、食害を受けている。加害動物として、シカ、サル、イノシシ、ノウサギ、キツネ、クマ、カラスがあげられた。シカ、サル、イノシシの影響が大きく、なかでもイノシシとシカの被害はすべての集落で確認された。

サルによる被害状況は、集落によって差がみられた。これはサルの生息範囲と出没形態に起因する。出没形態には「一匹ザル」とよばれる単独のものと、群れとに大別できる。北川流域では2集落すべてで、針畑川流域では一部の集落で被害が確認された。針畑川上流域の小入谷、生杉、

中牧、古屋では一匹ザルが出没するが、群れは見られないということだった。一方、下流域の平良、小川、および隣接する京都市の久多川合集落では群れで出没し、被害を与えていた。これら2地域の間位置する桑原では、昨年まで一匹ザルのみだったが、2005年に初めて群れが現れた点が特徴的であった。

聞き取りによると、サルとシカの出没はここ10-20年で増加しており、調査地域にはかつてサルは生息せず、シカもほとんどいなかったという。平成元年から15年までの有害鳥獣駆除実績からも、シカの頭数が著しく急増していることが読み取れる(図5-1)。イノシシは、昔から秋の収穫期に出現して田畑を荒らしてきたためか、出現頻度や被害程度は昔と比べて特に変化はないと認識されている。

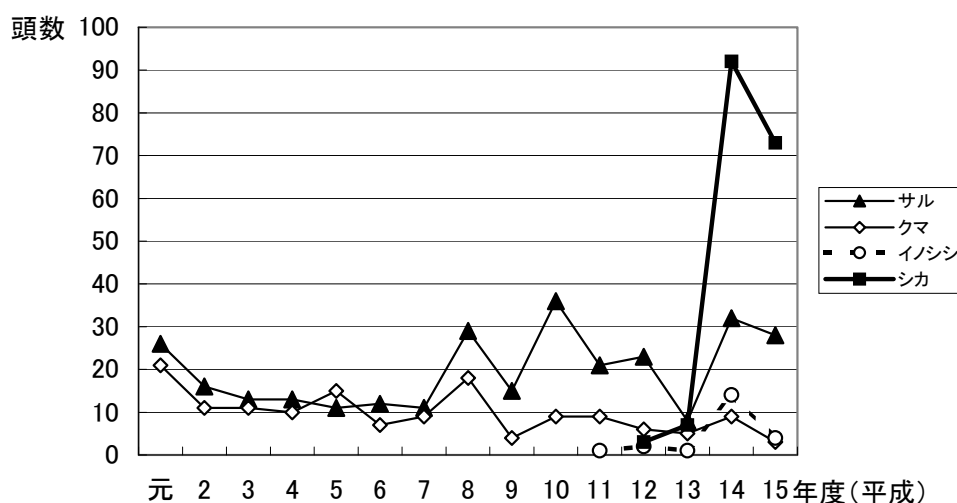


図5-1. 有害鳥獣駆除実績(朽木村資料より一部抜粋)

(4) 対策と課題

現在、主な被害対策として電気柵の設置、有害駆除、警戒パトロールの3つが実施されている。また、平成17年から新しく高島市に獣害対策協議会が設置された。

現在おこなわれているこれらの獣害対策の事業には、地区単位での申請により行政から補助金が支給される。電気柵は95%が補助、5%は個人が負担する。昭和50年代(1975年)からトタン囲いによる対策が始まり、1990年からは朽木村からの補助金により簡易電気柵が、平成12年から大型電気柵が設置された。しかし朽木谷では世帯が所有する田畑が数箇所分散するため、電気柵の設置が容易ではなく、また大型電気柵は雪や雑草に対する管理が必要である。朽木谷の獣害問題には、現在のところ有効な解決策がみつからないのが実情である。

(市野進一郎)

6. 人-野生動物関係の変遷

—共存への模索—

(1) テーマの位置付け

朽木谷では、近年野生動物による農作物の被害が急増している。その原因のひとつに、野生動

物の生息域である里山環境が大きく変化した点があげられる。いまや野生動物は農業従事者にとって対立的存在となりつつあるが、その一方で人間を生態系の一要素として捉え、野生動物との共存を目指す考え方が見直されている。本節では、獣害が深刻化する以前の朽木谷における住民と野生動物との関係に焦点をあて、人と野生動物との関係を再考し、両者の共存の道を探ることを目的とする。

(2) 隣人としての野生動物

聞き取り調査によると、かつて人々との関わりが深かった野生動物のひとつにイノシシがあげられる。大川神社（生杉）の祭礼では、イノシシ除けの祈願がなされていたという。また、いくつかの集落では、秋の収穫期に山から降りてくるイノシシを追い払うために水田近くに小屋を建て、寝泊りして作物の番をしたという。その経験をもつある男性は、「シシも賢こうて音をたてずに入ってくる」と笑いながら話してくれた。一方、現在農作物の被害が最も多いシカは、かつては集落でみられることはほとんどなく、秋の繁殖期に聞こえてくる鳴き声は、秋の風物詩として多くの人に懐かしげに語られている。このように、獣害問題が深刻化する以前は、人と野生動物は必ずしも敵対する関係にあったわけではなかったとみられる。

(3) 狩猟と獣肉利用

朽木谷では数種類の形態の狩猟が行なわれていた。多くの集落で聞かれたのが、ウサギを対象とした罾猟である。これは、終戦後頃まで、子供たちによって冬の積雪期に行なわれていた。多いときには一日に3~4匹が獲れ、それらは「すきやき」にして食べたという。

いくつかの集落では戦前や終戦直後まで、冬の積雪期に、イノシシやシカを対象とした集団による槍猟が行なわれていた。

また、猟を生業とする人々もあり、彼らはイノシシやシカ、クマを対象とした猟を行なっていた。古屋の猟師 M 氏、O 氏によると、クマ猟では、犬を使って樹上に追い上げたり、冬眠中の穴を見つかりして、銃でクマを仕留めたという。捕獲された動物は、煮たり、焼いたり、保存食にしたりするなど、さまざまな方法で食用に利用された。また、獣肉は猟に参加しない世帯にも

分配された。

最近では、猟師が捕獲したイノシシを旅館や民宿に売却するなど、商品としての利用もみられる。猟師によると、イノシシは、かつては胃にドングリが詰まり、脂肪がたっぷりついていたのが、ここ数年は胃の内容物が木の根や草などで、脂も乗らず、食性の酷さが伺えるということ

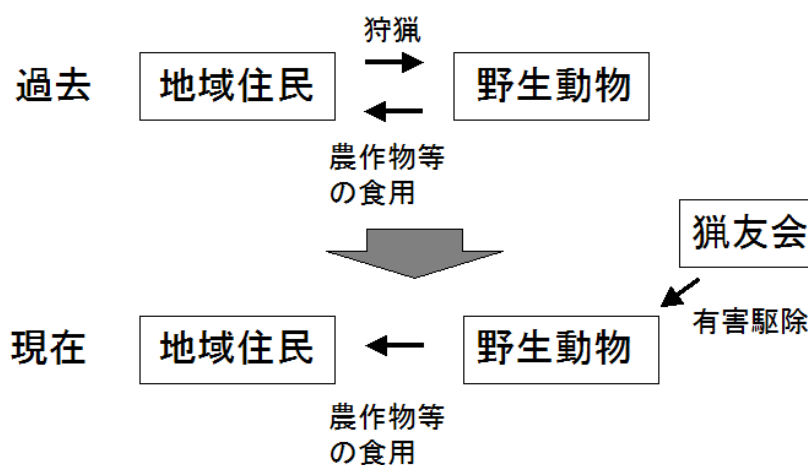


図6-1. 人—野生動物関係の変化

であった。

(4) 現在における人と野生動物の関係

かつて人は、狩猟をとおして食用とし、時には林産物を取り合いながらも、野生動物と棲み分けてきた。このような人-動物関係は、食や生業といった地域住民の生活システムに組み込まれた双方向的なものであったといえる。しかし、近年の関係は食用という部分が抜け落ちた一方のみとなり、従来のような相互的な関係ではなくなっている(図 6-1)。

現在では、朽木谷で猟師を専業とする人は皆無であり、兼業や趣味で行なう人がわずかにいるのみである。滋賀県猟友会に有害鳥獣駆除が委託されているが、駆除頭数が最も多いシカは食肉用として利用されずに廃棄処分にされている。駆除に協力する猟師のなかには、廃棄には心理的な抵抗があるため、燻製作りや地域のキャンプ場での消費など食肉利用を試みているという。

かつての人と動物の棲み分けの記憶と知恵が、今日の両者の対立関係を共存へと向かうための方策を生み出すきっかけになるのではないかと思われる。

(宮本直美)

IV 研究の総括と課題

ここでは、第Ⅲ章で示した6つのサブテーマから得られた結果をまとめ、総括としたい。

第1節からは、ホトラヤマの植生に関する生態学的調査から、その森林化の過程が示され、さらに里山利用の履歴の違いによって現在の植生構造に相違がみられることが明らかになった。また第2節の服飾文化の変遷からは、ライフヒストリーをまじえた具体的描写によって、生活の変化のプロセスが示された。

第3節、4節では、朽木谷の活性化にむけて「外部者」との関係のあり方が論点となった。朝市研究からは、都市住民が集まる朝市をとおして、栃餅をはじめとする里山の産物が商品価値をもつようになったことが示唆された。第4節では、今後の地域の担い手としても期待される村外からの移住者が集落社会に溶けこむには、いくつかの段階が存在することが明らかになった。「外部者」をいかに取り込むかという問題は、過疎化が進む朽木谷の活性化を考えるうえで重要な課題である。

第5節、6節は、獣害に注目した報告である。獣害は、植生の変化、生業変容、過疎化の進行などといった多様な要因が複雑に絡みあって起きている問題である。第5節ではその被害状況を報告するとともに、行政や地域住民によるさまざまな取り組みと、具体的な解決には至っていない現状を示した。また、人間と野生動物の関係の変化を扱った第6節では、かつての狩猟活動にみられたような、人-動物間における双方向的な関係が、現在では喪失されてしまったことが問題点としてあげられている。

これらの報告から明らかになったように、現在の里山をめぐる問題の背景となる要因は、多様かつ重層的に絡みあっている。そのため、こうした問題は解決が困難であることには違いない。しかし、本研究をとおして、都市住民や新規移入者との関わりのもとで、里山利用の新たな展開がみられつつある点も明らかになった。過疎化が進む朽木谷を再活性化するうえで、里山には大

きなポテンシャルが秘められている。その可能性をいかに引き出し、そして今後の地域づくりに活かしていくかが重要な課題である。以下に、本研究の結果から得られた提言をあげておきたい。

- (1) **里山の再利用**：二次的な自然環境形成を促すための植生攪乱をホトラヤマなどで引き起こし、新たに萌芽する有用植物（山菜など）の活用をはかる。また、その際に生じる伐採木や枝葉などを、椎茸栽培のホダギ、木炭、牧草などとして利用する。伐採などの労働には、NPO、観光協会などと連携し都市住民の協力を得る。
- (2) **獣肉の販売**：害獣駆除されたシカ肉を朽木谷の特産品として販売できるシステムを構築する。地域住民・行政・猟友会などが連携し、害獣駆除から販売までを責任を持って実施できる体制をつくる。さらに売り上げの一部を用いて、地域住民による、野生動物の簡易個体調査の実施をすすめる。
- (3) **特産品の開発**：朝市などで販売できる特産品の開発に力をいれる。現在では利用されなくなった里山資源を新たに工芸品として加工・販売するための状況づくりを促進する。その際に、朽木谷に伝承されてきた、麻織りの技術などを取り入れることができたらなおよい。
- (4) **開かれた地域社会の創造**：過疎化が進む朽木谷では、従来からの居住者と新規移入者の融和が不可欠となってくる。移入者が一足飛びに集落社会に溶け込むことは困難であるかも知れないが、新旧居住者が互いに時間をかけて、新たな地域社会を創造するという意識を共有することが重要である。地域社会が活性化することによって、里山の維持や新たな利用形態が生まれてくる。

最後に、本研究がとった研究方法について言及しておきたい。現実には起きている具体的な問題に対処しうる研究を目指すうえで、個別的な研究では原因および解決策を見とおすことはきわめて困難である。しかし本研究では、地域研究的手法—すなわち、特定の地域に焦点を絞り、学際的な視点から研究を進めるという方法—を採用したことにより、地域で起きている個々の事象を多角的に検討する視野を持ちうることができ、問題をより明確化し、そしてより深く考察することが可能になったと考えられる。

本研究を進めるにあたってご協力いただいた朽木谷住民の皆さま、高島市役所朽木支所、朽木観光協会をはじめとする多くの方々に謝意を表したい。この成果が朽木谷の活性化という形で還元されるべく、今後も活動を続けていく所存である。